

練習問題

1 次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

佐佐木信綱

B 春の鳥*1な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕べ

北原白秋

C 街をゆき子供こどもの傍を通る時蜜柑みかんの香かせり冬ふゆがまた来る

木下利玄

D 鳴く蟬せみを手握りもちてその頭あたまをりを見つつ童走わらわせ来る

窪田空穂

*1な鳴きそ鳴きそ〓鳴かないでくれ。

*2をりをり〓何度も。

問一 Aの短歌に用いられている表現技法を次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 対句法 イ 体言止め
ウ 擬人法 エ 呼びかけ

問二 Bの短歌に詠まれてある情景として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 夕日が野原を赤く染めるなか、春の鳥が鳴いている。
イ 鳥たちの鳴き声が、日没とともに聞こえなくなった。
ウ 昨日の夕方、春の鳥が鳴きながら飛び立っていった。
エ 春になり、わたり鳥が夕日に照らされひっそり飛んでいる。

問三 線①「冬がまた来る」とありますが、何によって作者はこう

感じたのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 子供の元気さ。 イ 街のさびしさ。
ウ 蜜柑の香り。 エ 外気の冷たさ。

問四 線②「その頭」とありますが、何の頭ですか。

問五 次の説明にあてはまる短歌をA～Dのうちから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- (1) 子供の動作だけが描かれているにもかかわらず、子供の緊張感や喜びが伝わり、それを見守る作者の愛情もひしひしと伝わってくる。
(2) 作者は小動物の様子にもさびしい気持ちをいつそうかきたてられている。だから、小動物に哀願するようにつたえているのである。

(3) 季節が変わろうとしつつあるさなか、見上げた作者の目に何かが映った。同じ音のくり返しが、作者の視点の動きや心の変化を巧みに表している。

(4) 作者は、何かの香りを感じ取った。それは、ある季節を代表するようなものから発せられるものであり、作者は、その季節の訪れを予感したのである。

2 次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

A わが声の吹きもどさるる野分のわきかな

内藤鳴雪ないとうのいせつ

B 流れゆく大根の葉のはやさかな

高浜虚子たかはまきよし

C 赤い椿つばき白い椿と落ちにけり

河東碧梧桐かわひびろへきごとう

D 花散つてきのふに遠き静しづか心

村上鬼城むらかみきじょう

問一 A～Dの俳句から季語を書き抜き、それが表す季節をそれぞれ漢字一字で書きなさい。

A 季語

季節

B 季語

季節

C 季語

季節

D 季語

季節

問二 A～Cの俳句から切れ字をそれぞれ書き抜きなさい。

A

B

C

--	--

問三 A～Dの俳句で、字余り（五・七・五の十七音より音数の多いもの）になっているものを一つ選び、記号で答えなさい。

問四 Aの俳句から強く伝わってくるものとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 辺りの静かさ。

イ 風の強さ。

ウ 声の力強さ。

エ 辺りのせまさ。

オ 川のそばだが、川は見えない所。

問五 Bの俳句で、作者がいる地点として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 川のそばだが、川は見えない所。

イ 川の音がかすかに聞こえてくる所。

ウ 川が遠くに見える所。

エ 川のすぐそば、あるいは川の中。

オ 川が遠くに見える所。

問六 A～Dの俳句の説明として最も適当なものを次のうちから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 対象となっているものの鮮やかな色彩が印象深く、あたたかも写生画を見ているような趣がある。

イ いくらか叫んでも、それがかき消されてしまう、自然現象の力強さが詠まれている。

ウ あるものに焦点をしばることで、流れの速さを実感をもって伝えていている。

エ 心配事がなくなつたので、作者の心はきのうまでとは違つておだやかである。

ア

B

C

D

エ

--	--	--	--